

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

第8回 全国大会プログラム

日時 2008年11月15日(土) 10:00~17:30

場所 関西大学 第1学舎1号館 (法文A棟：A301・A201・
「千里ホール・A」・「千里ホール・B」)
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
TEL：06(6368)1121(大代表)
(阪急電鉄「千里」線「関大前」駅「北口」より下車、会場まで徒歩約10分)

(第1学舎1号館：A301)

- | | | |
|---------------------------|-------------------------|-----------|
| ★総合司会 | 日本大学教授 | 原 公 章 |
| ★会長挨拶 (10:00~10:10) | 南山大学名誉教授 | 荻野 昌 利 |
| ★会場校挨拶 (10:10~10:15) | 関西大学副学長 | 芝 井 敬 司 |
| ★研究発表 (10:20~11:50) | | |
| 第一室 (第1学舎1号館：A301) | 司会 中央大学教授 | 大 田 美 和 |
| 1. ジェイン・エアの「娘たち」 | | |
| —— メアリ・カーペンターとジョセフィン・バトラー | 釧路公立大学准教授 | 市 川 千 恵 子 |
| | 司会 金沢大学名誉教授 | 藤 田 繁 |
| 2. セポイ反乱をいかに表象するか | 明治大学講師 | 加 藤 匠 |
| 3. ヴィクトリア朝英国における自治体公園の誕生 | | |
| —— バーケンヘッド公園の成立を通して | 関西外国語大学講師 | 芝 奈 穂 |
| 第二室 (第1学舎1号館：A201) | 司会 大阪ラスキン・モリスセンター館長 | 露 木 紀 夫 |
| 1. ジョン・ラスキンのaesthetic概念再考 | | |
| —— 後期の美術講義を手がかりに | 大分県立芸術文化短期大学専任講師 | 荻野 哉 |
| | 司会 新潟大学准教授 | 金 山 亮 太 |
| 2. ヴィクトリア朝視覚文化と劇場 | 愛知県立大学講師 | 松 浦 愛 子 |
| 3. バーナード・ショーの19世紀末演劇批評 | 愛知工業大学教授 | 磯 部 哲 也 |
| (第1学舎5号館 第3会議室) | | |
| ★理事会 (12:00~12:50) | 司会 駒澤大学教授 | 富 士 川 義 之 |
| (第1学舎1号館 千里ホール・A) | | |
| ★特別研究発表 (13:00~14:00) | 司会 京都大学教授 | 佐々木 徹 |
| Hawthorne の<みた>二つのイングランド | 関西大学教授 | 入 子 文 子 |
| ★シンポジウム (14:20~16:50) | 司会・講師 上智大学教授 | 舟 川 一 彦 |
| ヴィクトリア朝の大学——教養教育の理念と現実 | 南山大学名誉教授 | 荻野 昌 利 |
| | 関西大学教授 | 竹 内 洋 |
| ★総会 (17:00~17:30) | 司会 福島大学教授 | 辻 み どり |
| ★閉会の挨拶 (17:30~17:40) | 甲南大学名誉教授 | 村 岡 健 次 |
| ★懇親会 (18:00~20:00) | 関西大学100周年記念会館 レストラン「紫紺」 | |

【研究発表】

ジェイン・エアの「娘たち」——メアリ・カーペンターとジョセフィン・バトラー

釧路公立大学准教授 市川 千恵子

シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)は、英国女性の私的領域での使命と、キリスト教徒としての使命、さらに帝国主義事業における女性の使命とを複雑に結びつけた。また、ブロンテはヒロインの自分語りのなかに、隷属した東洋女性の救済という使命と、英国女性としての自由な主体の獲得という問題の複雑さを繰り返し暗示させている。

本発表では、19世紀前半の文学的想像力における女性と帝国の表象が、19世紀後半の女性と帝国の関係いかに影響を与えたのかを考察する。まず、『ジェイン・エア』におけるヒロインの自己・他者表象の政治性を再考し、この小説が提示した英国女性の使命を、メアリ・カーペンター（インド女性の教育改革）とジョセフィン・バトラー（インドの性病予防法廃止運動）がいかに引き継いだのかを検証する。そのうえで、文学テキストとフェミニスト活動家の著作に刻まれたジェンダー規範に対する抵抗と葛藤の様相を探りたい。

セポイ反乱をいかに表象するか

明治大学講師 加藤 匠

1857年に起こったセポイの反乱は、イングランド国内に大きな衝撃をもたらした。大英帝国のなかでも特に従順と見做されていたセポイが反乱を起こしただけでなく、女性や子どもを巻き込んだ虐殺が起きたという報道が『タイムズ』紙をはじめとするメディアを通じて流布し、作家たちは雑誌に掲載された小説や芝居を通じて、激しい怒りを露わにすることとなったのである。

本発表においては、セポイ反乱を実際に現地から報道し、後にその経験を *The Adventure of Dr. Brady* という小説にまとめた、『タイムズ』紙の従軍記者 William Howard Russell に注目する。当時の雑誌に掲載された作品や後に書かれた冒険小説などとの比較を通じて、ヴィクトリア朝期において、作品レベルでいかなる戦争表象が可能であったのかを論じることとする。

ヴィクトリア朝英国における自治体公園の誕生——バーケンヘッド公園の成立を通して

関西外国語大学講師 芝 奈穂

本稿は、1847年にイギリスにおける最初の自治体の設立する公園として開園したリバプール近郊のバーケンヘッド公園成立の過程を明らかにしながら、英国において19世紀中期に発達した公園制度とはいかなるものであったかを都市史の観点から考察するものである。ヴィクトリア朝の都市の諸要素のうち、道路整備や住宅開発、駅やタウンホール等の公共建築物の開発については、それぞれ詳細な研究がなされているが、公園については、社会史、経済史、ランドスケープデザイン史、都市環境史等、多面的な要素に関わる事柄に拘わらず、これまでその関心度は低かった。本稿では、裕福な商人や実業家等少数の名士からなる地方自治体の指導者たちが、いかなる理念のもと、バーケンヘッド公園を設立したのかを探求する。具体的には、公園設立にいたるまでの背景、計画のための財源確保の問題を分析し、さらにそれらの事項が、ジョゼフ・パクストンの設計による公園デザインにどのように表されていたのか、次いで、本公園が公共性という点においていかに世論を獲得していったかについて考察する。

ジョン・ラスキンの aesthetic 概念再考——後期の美術講義を手がかりに

大分県立芸術文化短期大学専任講師 荻野 哉

ヴィクトリア朝の美術批評家ジョン・ラスキン(1819-1900)は、前期の代表的な著作『モダン・ペイ

ンターズ』第2巻(1846)において、aesthetic 概念を単なる身体的・動物的な感覚と見なし、美の知覚から排除していた。しかし、後年オックスフォードでおこなった美術講義「フィレンツェにおける感性派と数理派」(1874)の中で彼は、“mathematic”という論理的思考に対する感性的なもの、さらには想像力や信仰に関わるものとして、aesthetic 概念を積極的に評価するにいたる。本発表では、ラスキンが取り上げたこの問題が、『ヴェネツィアの石』第3巻(1853)に見られるルネサンスの知識主義の批判とどのように結び付いているかを検討したうえで、芸術と科学あるいは知識との関係をめぐる一連の議論の内実を明らかにしたい。

ヴィクトリア朝視覚文化と劇場

愛知県立大学講師 松浦 愛子

最近の英国の劇場研究においては、これまで墮落の代名詞とされてきた19世紀演劇への否定的な評価が疑問視され、大衆劇場の再評価が試みられている。こうした傾向はカルチュラルスタディーズの影響であるが、劇場史再評価の試みは十分ではない。

この発表では、19世紀英国の人気劇作家D.ブシコーの演劇にみられる視覚的要素の重要性に注目し、特に1860年代の大衆劇場と視覚の近代化の関係について述べる。具体的には、ブシコーの作品 *The Colleen Bawn* と *The Streets of London* を考察し、ジョナサン・クレリー (Jonathan Crary) のいう視覚の近代化の課程にブシコーの視覚的要素を位置つけることで、演劇史を再考する新たな歴史認識の実証を試みる。

バーナード・ショーの19世紀末演劇批評

愛知工業大学教授 磯部 哲也

バーナード・ショーは、劇作家としてだけでなく、劇評家としても、イギリス近代劇運動の担い手であった。1895年から98年までの3年半に渡って、フランク・ハリスが編集する *The Saturday Review* で200作以上の芝居について劇評を担当した。劇評を担当するときまでに、ショーは『やもめの家』から『キャンディダ』までの5つの戯曲を執筆し、フェビアン協会での講演を基にした『イブセン主義真髓』を出版していた。したがって、劇評を通して、ショーの演劇観を知ることができる。

19世紀末のロンドンの演劇界は、ヘンリー・アーヴィング、エレン・テリー、サラ・ベルナルやエレオノラ・デューゼなどの俳優が活躍し、シェイクスピアは言うまでもなく、ワイルド、ピネロ、バリーなどの同時代の劇、イブセンなどの外国作品などが上演され、メロドラマから自然主義、社会主義、リアリズムの演劇へと変革していく時代であった。

ショーの劇評を通して、19世紀末のロンドンの演劇界の流れを考察してみたい。

【特別研究発表】

Hawthorne のくみた>二つのイングランド

関西大学教授 入子 文子

アメリカン・ルネサンスを代表する作家 Nathaniel Hawthorne (1804-64) は、1853年、領事としてリヴァプールに赴任、その後イタリアに滞在し、帰国に先立って再び「イングランドに戻ってきた」(オハイオ版22:469)。時あたかもヴィクトリア朝文化隆盛期、ロンドン万博後の間もない時であった。彼の目にイングランドはどのように映ったのであろうか。 *English Notebooks* の記述から類推すれば、ホーソーンは、眼前に捉えたヴィクトリア朝イングランドを透かして、それまで心の画布に描き続けたオールド・イング

ランドを眺め、さらにそれをアメリカのニュー・イングランドと二重写しにした。ホーソーンがくみた> ヴィクトリア朝イングランドは、肉眼と同時に心眼でくみた>二つのイングランドであった。本発表では、*English Notebooks* のテキストを他の彼の作品テキストと関連させながら、イングランドへの眼差しの特徴を把握し、<言葉による絵画>を描くホーソーンの想像力と思考の働きの特徴の一端を明らかにする。

【シンポジウム】

ヴィクトリア朝の大学——教養教育の理念と現実

司会・講師 上智大学教授 舟 川 一 彦

講師 南山大学名誉教授 荻 野 昌 利

講師 関西大学教授 竹 内 洋

「教養」論ブームが依然として継続している。が、人文系分野の研究・教育に携わっている本学会会員の大多数にとって、「教養」は単なる流行の話題以上の、わが身に直接関わる切実さをもつテーマであろう。このシンポジウムでは、「教養」にまつわる広範囲の考察対象の中からいくつかの論題を選択し、我々が自分のこととしてこの問題を考えるよすがとしたい。各講師の論題は以下の通り。

「Lit. Hum. とイギリス人の文化意識」。19世紀オクスフォードの古典人文学カリキュラムを制度史的背景に照らして考察し、現代人の文化意識に残存するその影響を指摘する。(舟川)

「古典か科学か——T. H. ハックスリーとマシュー・アーノルドの論争を中心に」。"liberal education" の中で science 科目の扱いを巡る二人の論争から浮かび上がってくる問題点を論ずる。(荻野)

「教養主義の没落とネオ大衆社会」。現代日本の社会構造の変化を背景にして古い「教養主義」の衰退を観察し、それに代わる現在と未来の教養のあり方を模索する。(竹内)

関西大学へのアクセス



<アクセス方法については別紙参照>

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 (The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：☎156-8550

東京都世田谷区桜上水 3-25-40
日本大学文理学部英文学研究室内
Tel/Fax: 03-5317-9709/9336
E-mail: victoria@chs.nihon-u.ac.jp